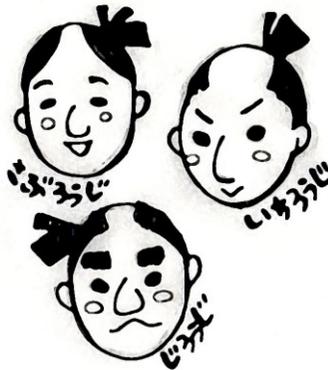


三人兄弟
さん にん き よう だい

菊池
きく ち

寛
かん



イラスト／池内
いけうち

舞
まい

一 三筋の別れ道

まだ天子様の都が、京都にあつた頃で、今から千年も昔のお話です。

都から二十里ばかり北に離れた丹波の国のある村に、三人の兄弟がありました。一番上の兄を一郎次と言いました。真ん中を二郎次と言ひ、末の弟を三郎次と言ひました。兄弟と申しましても、十八、十七、十六という一つ違いで背の高さも同じぐらいで、顔の様子や物の言い振りまで、どれが一郎次でどれが二郎次だか、他人には見分けの付かないほどよく似ていました。

不幸なことに、この兄弟は小さい時に、両親に別れたため、少しばかりあつた田や畑も、いつの間にか他人に取られてしまい、今では誰もかまつてく
れるものもなく、他人の仕事などを手伝つて、ようやくその
日その日を暮らしておりました。が、貧乏ではありましたが、

- 天子様：国を治める者。天皇。
- 里：一里は約四キロメートル。
- 丹波の国：旧国名。今の京都府の中部と、兵庫県の一部。

三人とも大の仲よしでありました。

ある夜のことでありました。一郎次は、何かヒドク考え込んでいましたが、ふと顔を上げて、

「こんなにして、毎日末の見込みもなしに、ブラブラ暮らしているよりも、いつそのこと都へ行ってみようかしら。都には、面白いことや賑やかなことが沢山あるそうだが。」と、言いました。それを聞くと、二郎次も三郎次も声を揃えて、

「それがいい、それがいい。都へ行けば、きっといいことがあるに違いない。」と、申しました。一郎次は、

「それなら善は急げというから、明日にも出立しよう。」と、言いました。そしてその晩は、みんなで色々出立の用意を致しました。

あくる日は、秋の空が気持ちよく晴れ渡って、太陽までが三人の出立を祝っているようでありました。三人は元気よく村を出まして、南へ南へと都の方を指して急ぎました。

● 出立…旅に出ること。

途中で、一晩泊まりました。村を立て、二日目の朝、大きな峠を登りますと、その峠の頂上から遙か彼方に、朝靄の中に、数限りもない人家が地面一ぱいに並んでいるのが微かに見えました。

「ああ、都だ。」と、三郎次が、大喜びの声を出しました。それから兄弟三人は、前よりも一層足を早めて、峠を駆け下りました。が、峠を下りましてから、都までは余程あると見え、歩いても歩いても、黄色い稲田が道の両側にいくらでも続いています。

大きい公孫樹が、道傍に一本立っていました。と今まで一筋道であった道が、その公孫樹の木の所から、三筋に別れているのに気が付きました。兄弟はちよつと困りました。

「どの道が一番近いのだろう。」と、一郎次が言いました。

「真ん中の道が一番近そうだ。」と、二郎次が言いました。

「いや、左の道が一番近そうだ。」と、末の弟が言いました。

すると、一郎次は、何やら考えた後で、

「私は、一番右の道が近いように思うのだ。が、どの道を行って

●稲田：稲の植えられた田。

も、都へ行き着けるのは確かだ。兄弟が一緒に揃って、奉公口を見つけるにも都合が悪くはなからうか。それよりも、皆別れ別れに、自分の近いと思う道を歩いて、銘々の運を試して見ようか。」と、言いました。

「それは、よい思い付きだ。」と、二郎次はすぐ賛成しました。三郎次は、兄たちに別れるのはちよつと悲しゅうございましたが、根が元氣のよい若者ですから、

「それなら、そうすることにしよう。」と言いました。

それで、一郎次は、右の道を、二郎次は真ん中の道を、三郎次は左の道を進むことになりました。別れる時に、二郎次は兄と弟を振り返りながら、

「たとい、ここで別れても、兄弟が、めいめい都で出世すれば、必ずどこかで逢えるに違いない。」と、元氣よく言いました。

-
- 奉公口：働先。
 - 根：もともとの性格が。
 - 出世：りっぱな地位や身分を得ること

二 右の道

まず、初めに右の道を進んだ一郎次のお話をいたしましょう。

一郎次は、弟二人と別れて、足を早めて、歩きましたが、その道は大層景色のよい道で、両側には美しい秋草が咲き乱れていました。二里も歩きました時、黄色い稲田の向こうに、青空に聳えて居る五重の塔が見えました。

「ああ、もう都もすぐだぞ。」と、一郎次は小躍りして喜びました。

ところが、ちようどそのとたんでした。道の行く手に、砂けむりが立ったかと思ふと、その砂けむりの中から、一頭の白い牝牛が太い鉄のような角を左右に振り立てながら、飛ぶように走って来ました。きつと、この牛は何かに驚いて、気が狂ったのでしよう。両の目は、炎のように真つ赤で、眼の前にあるものは何でもその角で突きかけようとするような勢いです。

一郎次は、その怖ろしい勢を見て、体を道傍へ除けようとしま

●小躍りして…おどるよう
して。

したが、牡牛はかえつて一郎次の方へ真つ直ぐに突き進んで来て、アツト思う間もなく、一郎次を二つの角で引っかけたかと思うと、一間あまりも投げ飛ばしたまま、また砂けむりを蹴立てて走つて行きました。

投げ飛ばされた一郎次は、右の腋の下に刀で刳るような痛みを感じました。彼は、もう死ぬような気がしました。

「ああ、俺は一番損な道を来たものだ。右の道を来たために、都の入り口で死ななければならぬか。」と、心の中で思いました。が、その中に傷の痛みが強くなって、いつの間にか気が遠くなつてしまいました。

何時間経つたのか、何日経つたのか、一郎次には分かりませんでした。ふと、目を覚ますと、自分は、立派な御殿の中に寝ていました。自分の体の上には生まれ一度も見なかったことのないほどの美しい絹の蒲団がかけてありました。枕元には、銀の碗にお薬が入つておりました。その上に、ふと気が付くと、美しい女の人が、部屋の中に一人坐つていました。

あま 余りに容子が変わっているので、一郎次は驚いて起き上がろうとしましたところ、右の腋の下が、また急に痛んで来ました。一郎次が、目を覚ましたのを見て、その女の人は、

「やつと、お氣が付きましたか、別に御心配なさらないでもよろしゅうございます。ここは、左大臣藤原道世様のお邸でございます。実は、昨日道世様が、鞍馬のお寺へ御参詣の途中、

お車を引く牛が、暴れ出して、あなたにそんな大傷を負わせたのでした。

道世様は、それを大層気の毒に思し召されて、お寺へ参る途中で人を殺しては、仏様に済

まない、出来るだけ手厚い介抱をして、あの若者を癒してやれと仰せになりましたので、あ

なたを御殿へ連れて来て、都で第一番のお医者を呼んで介抱

しているのです。」と、言いました。

一郎次は、夢ではないかと驚きました。

左大臣藤原道世と言えば、天子様の第一番の家来で、丹波

の国の田舎までも聞こえている、名高い人でありました。

その女の人は、しばらくすると、こう言いました。

-
- 左大臣：律令制の職。太政大臣の下、右大臣の上の位で、国の政務をつかさどる。
 - 鞍馬のお寺：京都市左京区にある鞍馬寺のこと。平安京の北方鎮護の寺として朝廷・民間の信仰が厚かった。
 - 御参詣：おまいり。
 - 思し召されて：お思いになられて。

「道世様が、こう仰いました。この若者は、遠い田舎から都へ出て来て、親類もない者に
 違う、傷が癒れば、家来にして使うてやろうと、仰いました。」
 それを聞くと、一郎次は、傷の痛みも忘れるほど喜びました。左大臣道世様の家来にな
 ることは、田舎の百姓の子である一郎次に取っては、この上もない出世でありました。
 一郎次の傷は、程なく癒りました。そして、約束のとおり、左大臣の家来になりました。
 正直で、利口な一郎次の事ですから、グングン出世しまして、十年経つか経たないうち
 に、検非違使という役になりました。そして名も左衛門尉清経と改めました。
 検非違使というのは、ちようど警察署長と裁判所長とを兼ねたような、大層勢いの強い
 えらい役で、盗賊や悪者を捕えて裁判するのが仕事でありました。
 一郎次はこんなに出世しましたが、真ん中の道を進んだ二郎次と左の道を進んだ三郎次
 とはどうなりましたでしょう。

●程なく…じきに。
 ●検非違使…平安初期に設けられた役職。
 京中の犯罪者の検挙や、のちに裁判も取り
 扱うようになり、強大な権限をもっていた。

三 真ん中の道

真ん中の道を進んだ二郎次は、兄と弟とに別れてからは、駆け出さんばかりに、足を早めて急ぎました。が、真ん中の道が一番近いと思つたのは、とんだ思い違いであつたと見え、二里歩いてても三里歩いてても道の両側には竹藪ばかりが続いていて、淋しい田舎道がどこまで来ても絶えません。そのうちに、暮れやすい秋の日が、いつの間にか、トツプりと暮れて、人通りのない街道は、大層淋しゆうございました。

三人兄弟の中では、一番気の強い二郎次も、とんと当惑してしまいました。

「この様子では今宵のうちには、とても都に着けそうにはない。どこかで一晩宿まることにしよう。」と思ひました。そのうちに道傍に地藏様のお堂がありましたからその縁外に上がつて、そこで一夜を明かすことにしました。ところが真夜中頃でした。寝入っている二郎次の肩を揺すぶつて、

「おいおい。」と、揺り起こす人がありました。

● 当惑して…とほうにくれて。

二郎次は、気がついて起きて見ると、見知らない人が自分の肩に手をかけていました。折おから空高くさし昇のぼっているお月様の光ひかりでその男を見ますと、それは武士らしいかにも強つよそうな男おとこでした。その男は、二郎次が目を覚さましたのを見ると、

「おい、お前は一体どの者だ。なぜこんな所で寝ねているのか。」と聞ききました。二郎次は、おずおずしながら、丹波の国から都へ行く訳を話はなしました。すると、その武士は親切しんせつらしい笑顔をえがおして、

「それはよい都合じゃ。わしの仕つかえている殿様は、お前まえのような若者わかものなら幾人いくにんでもお召めし抱かかえになるのじゃ。わしの殿様に奉公ほうこうする気はないか。」と言いいました。それを聞くと、二郎次は小躍りして喜よろこびまして、早速奉公さつそくほうこうしたいと申もうしました。

やがて、二郎次は武士に連れられて、その殿様のお館へ行くことになりました。武士は不思議なことに、都の方へは行かずに、道から左に折ひだりれて、小川に添そうた細い道を、ドン進すすんで行くのでした。二郎次は、ちよつと不思議に思おもって、

「そのお殿様とのさまというのは、都にお住いではないのですか。」

● お館やかた…御殿ごてん。

と聞きました。すると、武士は何気ない顔をして、

「都にもお館はあるが、今は、みぞろが池の傍に住んでいられるのじや。お前が、都見物に行きたいのなら、明日にも連れて行こうぞ。」と言いました。

そのうちに、道の行く手に、月の光に照らされて鏡のように光る大きな池が見えました。その池の水際には、蘆やよしがたくさん生え茂っている上に、池のぐるりには大木が生い茂って、大蛇でも住みそうな気味の悪い大池でありました。

二郎次は、こんな淋しいところに殿様のお館があるのかと不思議に思っていますと、武士は、「私に離れぬようにせよ。」と言いながら、大木の森の中の細い道を歩いて行くのです。

と、二三丁も来た頃です、急に今までの森がなくなつたかと思つくと、池に添うて広い平地があつて、その平地の真ん中に、それはそれは立派な御殿がありました。二郎次には生れて初めて見るほどの美しい大きな御殿でありました。先に立つてゆく武士は、

「さあ、お前も遠慮なく這入るがよい。」と言いながら、その御殿

-
- 蘆やよし：よしは蘆に同じ。蘆が「悪し」と同音なのをさけて「良し」にちなんでこうよんだ。いね科の多年草で水辺に群落をつくつて自生する。高さ約二メートル。
 - 三丁：一丁は約百九メートル。

の中へつかつか這入って行きました。

玄関から幾間も幾間も通つたと思つた頃、一つの大広間に来ました。その大広間は、銀の皿に、灯が幾十となく輝いて、昼のように明るうございました。

見ると、その広間の中には、どれもこれも強そうな男が三十人ばかりお酒宴をしていました。そして一番高い所に、身の丈が六尺もあるくらいな大男が、胡坐をかいて坐っていました。それはそれは強そうな、獅子でも虎でも一掴みにしそうな男でした。

二郎次を連れて来た武士は、その大男の前へ二郎次を連れて行って、「この若者が奉公をしたいと申しますから、引き連れてまいりました。」と申しますと、その大男は、

「よしよし。」と破れ鐘のような声を出して肯きました。それから、二郎次も皆と一緒にお酒を飲んだり、物を食べたりしました。それは生まれて初めて食べるような御馳走を、腹いっぱい食べました。二郎次は心のうちで、

-
- 身の丈：身長。
 - 六尺：一尺は約三十センチメートル。
 - 獅子：からしし。ライオン。
 - 破れ鐘のような声：ひびの入った鐘の音のようながらがら声。

「その日のうちに奉公口が定まつて、その上にこんな御馳走が食べられるとは、こんなうまい話はない。己が進んで来た真ん中の道は一番幸いな道だったな。」と思ひました。

その翌晩でした。昨日二郎次を案内して来た武士が来まして、

「今晚は、お殿様が都へおいでになるのじや。お前もお伴をさせてやる。」と言ひました。

しばらくすると、いよいよ出発ということになりました。お殿様という六尺に近い大男は、立派な白い馬にひらりと乗りました。その後から、上の方の家来が六、七人ばかり馬に乗つて続きました。残つた者は、めいめいお殿様の馬を囲んで行列を作つて歩きました。不思議なことに、どの男もどの男も、弓や長刀やを持っていました。二郎次にも、お前にはこれを貸してやると言つて、一本の太刀を貸してくれました。

二郎次は、こんなに夜遅くお殿様はどこへ行くのだらうかと疑ひながらも、黙つて付いて行きました。やがて、大きな川にかかつている橋を渡ると、そこはもう都の中だと見え、立派な家が沢山並んでいました。その中に、皆は中でも一番立派な家の前に止まりました。そして何か相談を始めました。

●長刀：反りかえつた長い刀
に、長い柄をつけた武器。
●太刀：刀。

じろうじ とのさま みやこ
二郎次はお殿様の都のお館というのは、この家のことかしらんと思っていますと、五、
にん おとこ なかま れつ はな おも
六人の男がバラバラと仲間の列から離れたかと思うと、この立派な家の塀をスルスルと登
りました。オヤオヤと驚いていますと、塀を登って這入った男が内から門をギイツと明け
ますと、仲間なかまの者ものは皆みな、長刀ながなたや太刀たちを抜き放はなして、ドヤドヤと門もんの中なかへ押し入おりました。
じろうじ あま おそ
二郎次は余りの怖ろしさにブルブル震ふるえていますと、昨日きのう二郎次を案内あんないした武士ぶしが傍そばへ来
ました。

なん おどろ
「何と驚おどろいただろう。己おれがお殿様とのさまと言いったのは、この頃都ごろみやこでも名なの高たかい鬼童丸きどうまるという
おどろぼう
大盗坊おどろぼうじゃ。お前まえは一たん奉公ほうこうすると言いったからには、逃にげる訳わけには行いかないぞ。さあ、己おれ
いっしょ みはりばん
と一緒にここで見張番みはりばんをするのじゃ。」
い
と言いいました。

じろうじ
二郎次はこれを聞きくと腰こしを抜ぬかすばかりに驚おどろきました。鬼童丸きどうまるというのは、その頃日本中ころにほんじゆう
だれし もの おどろぼう
で、唯ただ知らぬ者ものもない大盗坊おどろぼうでありました。二郎次は、知らぬ間まに、盗坊どろぼうの手下てしたになつてい
たことを心こころから悲かなしみました。すぐ逃にげようと思おもいましたが、案内あんないをした男おとこは、手てに弓ゆみを

も 持っていて、二郎次が逃げ出せば、一矢で射殺そうという様子が見えませんでした。

そのうちに、家の中では人の叫ぶ声や、斬り合いをする音がしたかと思えますと、盗坊共はめいめい金銀の這入った袋を重そうに担いで出てまいりました。

皆はその家の前で勢揃いをする、もと来た道を帰りました。二郎次も、逃げようとすればすぐにも殺されそうなので、恐る恐る後から附いて帰りました。

やがて、みぞろが池の御殿へ帰って来ますと、鬼童丸は手下を大広間へ集めて、盗んで来た金銀を山のように積んで、それを一掴みずつ手下にやりました。二郎次が片隅にブルブルと顫えていますと、鬼童丸は破れ鐘のような声で、

「おい、小僧、遠慮をせいでもよいぞ。お前にも一掴みやるぞ。」と言いました。貰わなければ掴み殺されそうなので、二郎次はビクビクしながら、受け取りました。

が、受け取って見ると、それは金や銀のお金で、二郎次などが夢にも見たことのない大金でありました。根が三人兄弟の中では慾の一番深い二郎次でしたから、そんな大金を見ると、フラフラと悪い心が起こりました。お金がこんなに儲かるの

● せいでも：しなくても。

ほど遠いと見え、日の暮れかかる頃に、ようやく都の町はずれに着きました。もう足がくたびれて、一足も歩けないほどに疲れていました。どこかに宿屋はないかと、キヨロキヨロ見廻しながらやって来ますと、

「もしもし。」と三郎次を呼びとめる女の人がありました。

「はいはい、私をお呼びになりましたか。」と立ち止まりますと、女の方は三郎次の顔を見ながら、

「あなたは旅のお人でございますか。」と聞きました。

「はい、私は丹波の国から都へまいるものです。」と言いました。すると、女の方は喜んで、

「それでは、お気の毒でございりますが、私の主人の家までちよつとお出で下さい。決して悪いことではありませんから。」と申しました。

三郎次は喜びまして、誰一人知る辺のない都の中で、こんな親切な人に逢うのは、地獄で仏に逢うようなものだと思います。

●知る辺…知り合い。

おんな ひと さぶろうじ
女の人は三郎次を連れて半町ばかりも歩いたかと思うと、立派な家の中に這入りました。
さぶろうじ あと つづ はい
三郎次も後から続いて這入りました。その家は、周囲が六、七町もある広い邸で、邸の中には大きなお蔵が十五、六もずらりと建ち並んでおりました。

おんな ひと さぶろうじ
女の人は、三郎次を連れて、長い廊下を通ったかと思ひますと奥の一間へ案内しました。
み へや へや め くら
見ると、その部屋は、目も眩むような美しい部屋で、床の間には金や銀の道具がたくさん置いてありました。三郎次があまりの美しさにぼんやり立っておりましたと、女の人は、

「あすここに寝ていられるのが御主人様でございます。」と言ひました。

うえ ね
いかにもその美しい部屋の真ん中に、一人の年寄の病人が、苦しい息をしながら、床の上うえに寝ていました。

さぶろうじ
三郎次は、おずおずそこへ坐りました。すると病人は女の人に、

「それでは、娘を呼んで来い。」と言ひました。

おんな ひと
女の人は、

「はい。」と答えて、静かに立って行きました。

● 半町…丁と同じ。一丁は約一〇九メートル。

三郎次がおずおずと年寄りの側に坐つて待つておりますと、そこへ間もなく十五、六の美しい女の子が這入つて来ました。年寄りは三郎次に向かつて、

「お前さんは旅の方ですか。」と、苦しうに尋ねました。

「はい、左様でございます。」と三郎次は優しく答えました。すると、年寄りは寢床の上で半分体を起しかけながら、

「私はあなたにお願いがあるのじや。なんと聞いてはくれまいか。今にも死にそうなの病人の一生の願いを、どうか聞き届けてはくれまいか。」と、手を合わさんばかりに言いました。

三郎次は、苦しうな病人の様子を見ると、気の毒になりましたので、
「私の出来ることなら、何でも聞いてあげます。」と言いました。すると、病人はホツと安心したように、

「お願いというのは別のことではないのだ。この娘をお前さんのお嫁にして、この家を継いでくれまいか。」と言いました。

これを聞いた時の三郎次の驚きと喜びとは、どんなであつたでしょう。が、よく考えると、自分のような乞食同様な百姓を、こんな長者の内の婿にする筈はない、これはきつとこの年寄りの気が狂っているのか、それでなければ笑談に言っているのだと思ひましたから、正直な三郎次は少しムツとして、

「子供だと思つて私をなぶるのはよして下さい。私は百姓の粹で、こんな長者の内の婿になるような者ではありません。」と言ひました。すると、その病人は悲しそうな顔をして、「訳を話さなかつたのは私が悪かつた。訳を話さなければ合点の行かぬのももつともじや。私の恥を話すことにしましょう。」と、病人は苦しうにコンコン咳をしながら話しつづけました。

「一体、私は一代のうちに、十萬貫（昔のお金の名です）という身代を作つたもので、都でも加茂の長者と言へば、誰知らぬ者もありません。が、私がお金を蓄めたのは、正直な正しい遣り方ではなかつたのです。私はお金を蓄めるのに、いろいろ悪いことを

●長者：金持ち。

●笑談：冗談。

●なぶる：からかう。

●合点の行かぬ：納得できない。

●一体：そもそも。

●身代：財産。

●加茂：現在の京都市北区・左京区一帯の地名。正式には

賀茂、または鴨。

しました。貧乏人にお金を貸して、高い高い利子を取ったり、百姓から重い年貢を取ったり、時々は賈の証文を書いて、他人の家や、田畑を騙して取ったりしたこともあります。その上、出すことと言ったら、一文も出しません。どんなに困っているものがあっても、米一合、お金一文も恵んだこともありません。そのお蔭で、お金は面白いようにどんどん溜りました。

その代わり世間の人からは、全く、鬼か蛇のように憎まれて来ました。私はついこの頃まで、お金さえあれば、どんなに憎まれてもかまうものかと思っていました。

ところが、今年の春、私の妻が死にました。その上、秋の初めから、私も重い病気になりました。私には、子供と言つてはこの娘がたった一人なのです。私は私がこの病気で死んだら、娘が一人ぼっちになって、さぞ困るだろうと思ひましたので、私の生きているうちに、是非よい婿を取つてやろうと思つて、都の内を探しにかりました。

すると、どうでしょう。年頃の若者のある家では、どの家でも、幾

- 年貢：平安末期以後、莊園の領主や大名が農民に課した租税。はじめは米で納めるのがふつうだった。
- 証文：証拠となる文書
- 一文：昔のお金の単位。わずかな金額。

からお金があつても、加茂の長者の家へは婿にはやれない。鬼の家へ婿にはやれないと、誰ひとりむこ一人婿に来ようという人はないのです。私は、お金があれば何でも出来ると思っていました。それが、私の大きな誤りでした。私は、たった一人の娘に婿を取ってやることさえ出来ないのです。娘はそれを知ると、毎日泣きました。私も娘が可愛そうで泣きました。十萬貫という大金も、今では何の役にも立たないのです。

その内、私の病が重つてもう今日死ぬか明日死ぬか分からない命なのです。私が死んだら、娘はたった一人世の中に取り残されて、憎まれ者の子として、世間からどんなにじめられるだろうかと思ひますと、私は死ぬにも死なれないのです。

私は、とうとうこう考えました。都の人はみんな加茂の長者を憎んでゐるから、とても婿に相手はあるまいが、旅の人なら私を憎む訳はないのだから、来てくれるかも知れないと、思ひましたから、私は召使いの者を街道へ出して、旅の方に来ていただくことにしたのです。運よく、あなたのような立派な方に来ていただくことが出来て、こんな嬉しいことはありません。親子二人を助けると思つて、どうか私のお願いを聞い

● 来手……くる人。

くだ
て下さいませんか。」と言いうかと思おもうと、病人びょうにんはさもさも疲つかれたように、グツタリと俯うつぶ伏せしてしましまいました。

さぶろうじ はじ としよ ねが わけ わか
三郎次三郎次は、初はじめて年寄としよりの願ねがいの訳わけが分わかりました。が、どんなにお金かねがあつても、都中みやこじゆうの人ひとから鬼おにのように憎にくまれて居いる家うちの婿むこになつては、どんなひどい目めに逢あうかも知しれぬと思おもいましたので、一度いちどは断ことわろうと思おもいました。

が、よく見みると、病人びょうにんも可愛かわいそうな娘むすめも、シクシク泣ないていても三郎次さぶろうじが断ことわつたら、病人びょうにんは悲かなしみの余あまり、そのまま息いきが絶たえはせぬかと思おもわれましたから、根ねが氣きの優やさしい三郎次さぶろうじは、

「そんなに、お頼たのみなら、いかにもこの家うちの婿むこになりましよう。」と申もつしました。すると、病人びょうにんは手てを合あわして、三郎次さぶろうじの方ほうを拜おがむように見みえましたが、それで安あん心しんして氣きが緩ゆるんだと見みえ、そのまま息いきが絶たえました。

さぶろうじ かな なくさ むすめ だ あと むすめ よめ
三郎次三郎次は悲かなしみに暮くれている娘むすめを慰なぐさめて、お葬とむらいを出だした後あとで、その娘むすめをお嫁よめにししまして、二代目にだいめの加茂かもの長ちやうじや者まになりました。そして、身代しんだいの十じゆう万まん貫がんの半はん分の五ご万まん貫がんを、都中みやこじゆう

● お葬むらい…お葬そう式しき。

の貧乏人に分けてやりました。すると、世間は正直なもので、都の人々は寄ると触ると、
「前の加茂の長者は鬼であったが、今度の長者は仏様じゃ。仏の長者じゃ。仏長者じ
や。」と、噂しました。

こうして、三郎次は夫婦仲よく、貧乏人を恵んで、幸福に暮りました。花子と言う可愛い
女の子が生れて、いつの間にか十年ばかり経ちました。

さて、一郎次と二郎次と三郎次のめいめいの話はこれで済みましたが、一体三人は何処で
出会うでしょうか。

五 三人兄弟の会った所

三人の兄弟が、都へ出る途中で、三筋の道に別れてから、十年も経ちました頃のこと
です。その頃検非違使(今の警察署長と裁判所長とを兼ねている役であることは前に言いま
した)というエライ役を勤めて居る一郎次の左衛門尉清経の下へ、

●寄ると触ると…寄り集まるたびに。

その頃都で名高い加茂の長者から訴えがありました。

それは、その前の晩、加茂の長者の家へ三十人ばかりの盗賊の一隊が押し入ってお金をたくさん盗んで行ったばかりでなく、娘の花子を攫って行ったと言うのです。左衛門尉清経は、前から盗賊のあばれ廻ることを怒っておりましたが、こんなに都の中へと這入って来るようでは、もう一刻も、そのままには、捨てて置けないと思ひました。それで、家来の者を二百人ばかり集めまして、

「噂にきくと、加茂川の水上のみぞろが池には、鬼女が住むという噂があつて、人の近よらないのをよいことにして、多能丸という大盗棒が立派な邸を作つて住んでおると言うことじゃ。加茂の長者の家に押入つた盗賊も、この多能丸に違ひない、早速かけ向こうで、必ず生け捕りにして来い。」と、申し付けました。

その翌日のことでした。みぞろが池に行つた家来の一人が走つて帰りました。

「殿様、およろこび下さいまし。多能丸を見事に生け捕りました。長者の娘の花子も、無事に取り返しました。」と申しました。

左衛門尉は大喜びで、別の家来に、

「すぐ加茂の長者の家へ行って、花子を受け取りに来いと言え。」と、申しました。

やがて、検非違使のお役所へ、高手小手に縛られた多能丸が、連れられて来ました。そして、庭の白い砂の上に、坐らされました。ちようど、そこへ加茂の長者が娘を受け取りに自分でやって来ました。これは縁側の上に坐っておりました。

間もなく、シイツ、シイツと、声が出たと思うと、烏帽子をつけて立派な服を着た左衛門尉が、しづしづと現れました。左衛門尉は、一番高い上座に坐ると、加茂の長者の方を見て、「お前が、加茂の長者か。」と、言いました。今まで俯いて居た長者は、顔を上げて、

「はい左様でございます。」と、言いました。その顔を一郎次の左衛門尉がよく見ますと、それは紛れもない弟の三郎次ではありませんか。一郎次の左衛門尉は、思わず大きな声を出して、「おう三郎次ではないか。」と、申しますと、三郎次も、検非違使の

● 高手小手：両手を背なかにまわし、首からひじ、手首にかけて嚴重に縛りあげること。
● 烏帽子：元服した男が略装につけるかぶりもの。もとは黒い絹でつくったが、後世は紙でつくり漆でぬりかためた。烏の羽のように黒くぬった帽子の意。

お役所やくしょだと言いうことも忘わすれて、

「おう、兄にいさんですか。」と、言いいました。二人ふたりは、両方りょうほうから抱だき付つくようにしてオイオイ泣なきました。

が、泣ないているのは、二人ふたりばかりではありませんでした。

砂すなの上に坐すわっている、盗賊とうぞくの多能丸たのうまるも、やつぱり、縛しばられた身みを悶もだえながら、齒はを喰くいしなばって泣ないていました。大粒おおつぶの涙なみだがポロポロと、砂すなの上に落おちました。

多能丸たのうまるの泣ないて居いるのに、ふと氣きが付ついた一郎次いちろうじと三郎次さぶろうじとはこれはまたどうしたわけかふしぎとおもおもと不思議ふしぎに思おもって、この盗賊とうぞくの顔かおを見みました。それは、一郎次いちろうじには弟おとうと、三郎次さぶろうじには兄あにに当あたる二郎次じろうじに違ちがいありませんでした。

三人兄弟にんきょうだいが、そのときの驚おどろき喜よろこび悲かなししみは、どんなでしたらう。それは、皆みなさん自分じぶんで考かんがえて見みて下ください。

三人兄弟にんきょうだいが、三筋みつじの道みちに別わかれた時ときは、たつた一足ひとあしの違ちがいでありました。それがおしまい

には、こんなひどい違いになりました。

(おわり)

『少年少女日本文学館 第七卷』(講談社)より

(このお話は、はじめ「一郎次、二郎次、三郎次」という題名で、大正八(一九一九)年四月(六月に「赤い鳥」という雑誌に発表されました。)

※新仮名遣いになおしています。